学群の特色を活かした教育：体育専門学群

尾縣　貢
人間総合科学研究科助教授

前号の特集「現場から①学群・学類教育」を読み、諸先生の工夫やその心意気を知り、私も体育専門学群における教育について考えてみたところ、「授業」と「運動部活動」が教育の両輪となるべきである、という結論に至った。この二つを通して、社会で通用する人材を育成することが究極の目標であると考えたのである。しかし、現状を見ると、運動部活動はプラスの産物ばかりを生みだしているわけでもない。他大学の運動部での数々の不祥事、最近では甲子園優勝校での指導者による暴力事件に見られるように、本来スポーツが有する素晴らしい魅力と効用が、運動部活動という枠の中では失せてしまうこともある。

そこで運動部活動に参加する全ての学生が最大限の恩恵を受けるために、いかに取り組むべきかについて私なりに考えてみたい。まずは指導者と指導を受ける学生が共に学ぶことである。効果的な練習の実践、部の運営、地域社会への貢献などいろいろな事について徹底的に検討するのである。私が監督を務める陸上競技部では、約230名が必ず一つの委員会（トレーナー、広報、競技会委員会など）に所属し、部の柱となるべく学んでいる。

二つ目は、活動にゆとりを持たせることである。学習に十分な時間を取ったり、大学生としての教養を身につける余裕も必要である。そのために練習は、短時間で効率の上がるものでなければならない。日本のスポーツ界は、多くの時間を費やして勝つことを美徳とする傾向にあるが、本当に求められることは、短い練習時間で成果をあげることである。ここでは、もう一つの車輪である「授業」で得た知識や情報が大いに役に立つ。

活動をオープンにすることも大切である。運動部は、閉鎖的でそれぞれで独自の世界を築くことが多いからである。その内部で、ゆがみが生じても外の世界を知らないものだから気づかない。これが古い封建的な運動部体質をつくり、問題が生じるのである。運動部活動をオープンにして、参加しやすい雰囲気をつくる必要がある。

「勝ち負け」以上に運動部には大切なことがある。それは、運動部に健全な社会の機能を持たせ、教育の場として活用することであろう。

（おがた　みつぎ／コーチ学）